

マイクロ・ヒストリーの試みの提言

マイクロ・ヒストリーの視点

マイクロ・ヒストリーとは、大局から歴史を語る方法とは逆に、ある出来事、人物、地域などの限られた対象に密着し、歴史の細部から全体を見ていこうとする歴史研究のスタイルである。1980年代前後にヨーロッパなどで始まったが、これまで日本で実践されたケースは少ない。

史実の細部に徹底的にこだわるこの手法は、地域社会や住民に寄り添って語られる地域史の叙述に最も適したものではないか、とかねがね考えてきたのであるが、今回、市民と戦争の関係を叙述した市史ブックレット『昭和20年の茅ヶ崎』（2015年8月）において、編集員の協力を得て、この手法に挑戦することができた。

市民の視点から見た戦争

これまでの地域史における戦争は、国民動員の歴史として動員する側の視点から記述されることが多く、全国史の縮小版に止まる嫌いがあった。しかしそれでは、すべての地域が同じように語られてしまうことになる。

全体から部分を語るのではなく、否応なく戦争に巻き込まれた普通の市民の視点から、戦争を語ることはできないだろうか。市民という戦争の「底辺」に位置していた人々の思いや生活、といったいわゆる「銃後」から戦争をみることによって、戦争のもうひとつの側面を掘り起こしていく必要があるのではないか、という思いが消えなかったのである。

「非常時下」における「銃後」の「日常」は、戦争体験としては、「戦場」や「空襲」のように苛烈でも悲惨でもなく、また全国にありふれていて、ある意味で珍しくも面白くもないかもしれない。しかし、ありふれていたとしても、そこには間違いなく市民の生活があり、それこそが、市民自身が記憶していた「戦争」だったのではないのか。だからこそ、市民の戦争の実感を伝えるものとして、忘れてはいけない記憶ではないのか、という思いから、これまで見落とされてきた「生活の中の戦争」に目を向けることとした。

細部に切り込む

マイクロ・ヒストリーは苛烈さや悲惨さを比較することが目的ではない。しかし、「ありふれた日常」の中に、どのようにすれば「戦争の中の市民」を発見することができるのか。やってみると、これまでの手法とは様々な点で異なったアプローチが求められた。

細部に切り込むには、「読み」の可能性を出来る限り追い求めていかなければならなかった。史料を集め直すことは勿論のこと、史料の行間を読むだけでなく、裏から読んだり、逆さまに読んだりするような史料解読の上に、対象にぎりぎりまで迫るため、恣意に陥ることを避けつつも、ここまで踏み込んでよいのか、という史料の中に分け入るような主観的な読み取り方も必要となった。体験者のオーラル・ヒストリー（聞き書き）も、日常生活感覚を反映した記憶として、可能な限り活用したつもりである。

執筆に当たって、わたしたちが意識したポイントは二つある。

第一は、ミクロとマクロに上下関係はない、という点である。わたしたちは、マクロを語るのに最適なミクロ世界を発見することが、マイクロ・ヒストリーの本質とは考えていない。特に地域史におけるマイクロ・ヒストリーは、特別な記憶を発見することが目的なのではない。

日常世界における戦争は、地域の特性に応じて多様であったはずである。だから逆に、その多様さこそが地域の性格を明らかにする上で重要なはずである。戦時期における茅ヶ崎町のミクロ世界の相似形は、他の地域にもあるかもしれない。あるいは全く異なるミクロ世界ももちろん存在するであろう。当然そこに優劣の差はない。ミクロからマクロを相対化し、ある時代における歴史世界の多様性を解明することが重要なのではないか。

そこで、それらの局面について細部にこだわって再現し、当時の市民が直接に皮膚で感じた事実を明らかにすることで、戦争の記憶を再構成しようと試みた。上からの視点、全体的な視点からでなく、市民の視点、日常の視点からビビッドに語ろうとしたのである。

第二は、その上で、ミクロからマクロを問いかける姿勢が重要だ、という点である。ミクロ世界を解明したことに満足してしまっただけでは、無数のミクロ世界が散らばるだけで終わってしまう。掘り下げた地点から、もう一度マクロ世界に目を向ける必要がある。多様性の中に刻印された時代の本質を発見することに努力することが重要であろう。

細部から全体へ

建築家ミース・ファン・デル・ローエの「神は細部に宿る」、あるいは道元の「一茎草を稔じて宝王刹を建て、一微塵に入りて大法輪を転ぜよ」などの箴言もある。歴史においても、細部を大事にしなければ、時代の本質に迫ることはできないのではないだろうか。

時代の多様性と本質、という要素は一見矛盾するようではあるが、実は矛盾しないはずである。様々な部面で、茅ヶ崎で繰り広げられた戦争と市民の関係は、全国共通の側面と、茅ヶ崎ならではの独自の側面とが絡み合った複雑なものであった。そこには、予想されたこともあれば、意外な発見もあった。

一つ一つの局面は、個別的で全体が見えにくいものでありながら、それが寄せ集まることによって、自然と地域の姿が見えてきた。戦争の影響は、地域の特性によって現れ方が異なるものであり、決して一色で戦争を語るができないのだ、ということ再認識させられた作業であった。

マイクロ・ヒストリーの、事実に細部まで徹底的にこだわることによって、そこから新しい発見を見出そう、ということは、別に地域史に限られた手法ではないが、最もやりやすいのが地域史であることも、また事実であろう。

戦争に限らず、災害史などにおいてもマイクロ・ヒストリーの手法は有効であろうし、細部にこだわる姿勢は、様々なジャンルにおいて、発見をもたらすに違いない。

地域の記憶が、繰り返しや一面化に陥らないようにするためには、絶えざる発見の努力が必要である。史実を徹底的に検証し、見落とされてきた記述や証言を掘り上げ、そこから、新たな歴史像を作り上げる努力が求められているのではないか。